

## 計測コラム emm68 号用

### 波形と FFT - 6

#### 6. フーリエ級数・フーリエ変換

##### (1) フーリエ級数 フーリエ係数

$$\begin{aligned}
 f(x) &= \frac{a_0}{2} + a_1 \cos x + b_1 \sin x + a_2 \cos 2x + b_2 \sin 2x + \dots \\
 &= \sum_{m=0}^M (a_m \cos mx + b_m \sin mx) \\
 a_m &= \frac{1}{\pi} \int_0^{2\pi} f(x) \cos mx dx \\
 b_m &= \frac{1}{\pi} \int_0^{2\pi} f(x) \sin mx dx
 \end{aligned}$$

##### (2) 1 周期を T としたフーリエ級数 フーリエ係数

上記 (1) の  $x$  を  $x = \omega t$  と置き換えて ;

$$\begin{aligned}
 f(t) &= \frac{a_0}{2} + a_1 \cos \omega t + b_1 \sin \omega t + a_2 \cos 2\omega t + b_2 \sin 2\omega t + \dots \\
 &= \sum_{m=0}^M (a_m \cos m\omega t + b_m \sin m\omega t)
 \end{aligned}$$

$$a_m = \frac{2}{T} \int_0^T f(t) \cos m\omega t dt \quad m = 0, 1, \dots$$

$$b_m = \frac{2}{T} \int_0^T f(t) \sin m\omega t dt \quad m = 0, 1, 2, \dots$$

##### (3) 複素フーリエ級数・複素フーリエ係数

オイラーの公式

$$\cos \theta = \frac{e^{j\theta} + e^{-j\theta}}{2}$$

$$\sin \theta = \frac{e^{j\theta} - e^{-j\theta}}{2j}$$

を考慮して (2) は ;

$$\begin{aligned}
 f(t) &= \frac{a_0}{2} + \sum_{m=1}^M \left\{ \frac{1}{2}(a_m - j b_m) e^{jm\omega t} + \frac{1}{2}(a_m + j b_m) e^{-jm\omega t} \right\} \\
 &= \sum_{m=-M}^M C_m e^{jm\omega t} \quad M \rightarrow \infty \\
 C_0 &= \frac{a_0}{2} \quad , \quad C_m = \frac{a_m - j b_m}{2} \quad , \quad C_{-m} = \frac{a_m + j b_m}{2} \\
 C_m &= \frac{1}{T} \int_0^T f(t) e^{-jm\omega t} dt
 \end{aligned}$$

< 補足 >

$$C_{-m} = \frac{1}{T} \int_0^T f(t) e^{-j(-m)\omega t} dt = \frac{1}{T} \int_0^T f(t) e^{jm\omega t} dt$$

一方、 $f(t)$ は実関数なので

$$C_m^* = \left( \frac{1}{T} \int_0^T f(t) e^{-jm\omega t} dt \right)^* = \frac{1}{T} \int_0^T f^*(t) (e^{-jm\omega t})^* dt = \frac{1}{T} \int_0^T f(t) e^{jm\omega t} dt$$

よって

$$C_{-m} = C_m^*$$

実関数の複素フーリエ係数は  $C_m$ 、 $m = 1 \sim M$  を計算すれば、あとは複素共役  $C_m^*$  をとればよいことになります。

なお、 $C_m$ の実数部と虚数部は、複素フーリエ級数展開することにより、正負の周波数成分にわかれ、フーリエ係数  $a_m$ 、 $b_m$  の 1/2 となります。

#### (4) フーリエ変換、フーリエ逆変換

T を無限大に拡大することで、周期性のない波形【非周期関数】でもフーリエ級数に展開できるようにしたものです。

フーリエ係数  $C_m$  を求める式も 1 つの関数と考え、これをフーリエ変換といいます。 $f(t)$  はフーリエ変換の逆の計算をする関数と考えて、フーリエ逆変換といい、フーリエ変換、フーリエ逆変換を一對の式として考えます。

フーリエ変換

$$F(\omega) = \int_{-\infty}^{\infty} f(t) e^{-j\omega t} dt = \int_{-\infty}^{\infty} f(t) \cos \omega t dt - j \int_{-\infty}^{\infty} f(t) \sin \omega t dt$$

$$= \text{Re}[F(\omega)] + j \text{Im}[F(\omega)]$$

フーリエ逆変換

$$f(t) = \frac{1}{T} \int_{-\infty}^{\infty} F(\omega) e^{j\omega t} d\omega$$

実部 Re、虚部 Im は

$$\text{Re}[F(\omega)] = \frac{1}{T} \int_{-\infty}^{\infty} f(t) \cos \omega t dt$$

$$\text{Im}[F(\omega)] = -\frac{1}{T} \int_{-\infty}^{\infty} f(t) \sin \omega t dt$$

### (5) 離散的フーリエ変換 フーリエ逆変換

実用性を考えると T は有限をとることになります。また、FFT アナライザでは AD 変換してサンプリングされたデータ列の有限個 N をとり、フーリエ変換が実行されます。サンプリングすると【離散的】(連続していない飛び飛びの値) になりますから、 $T = Nh$  (h はサンプリング間隔の時間) より T の代わりに N 個とすると、離散的フーリエ変換、フーリエ逆変換の第 k 項を考える (周波数は k になるので)

$\int_{-\infty}^{\infty}$  は  $\sum_{n=0}^{N-1}$ 、t は nh に置き換えて;

$$F(k\omega) = \frac{1}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) e^{-jk\omega nh}$$

$$= \frac{1}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \cos k\omega nh - j \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \sin k\omega nh$$

$$f_k(nh) = \frac{1}{N} \sum_{n=0}^{N-1} F(k\omega) e^{jk\omega nh}$$

実部 Re、虚部 Im は

$$\text{Re}[F(k\omega)] = \frac{1}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \cos k\omega nh$$

$$\text{Im}[F(k\omega)] = -\frac{1}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \sin k\omega nh$$

## (6) 離散的フーリエ級数、フーリエ係数

サンプリングされた離散値でフーリエ係数を求めるには、上記(5)を展開して次式で計算します。フーリエ級数、フーリエ係数と実部、虚部の関係を対比して記します。

<フーリエ級数、フーリエ係数>

$$\begin{aligned}
 f(t) &= \frac{a_0}{2} + a_1 \cos \omega t + b_1 \sin \omega t + a_2 \cos 2\omega t + b_2 \sin 2\omega t + \dots \\
 &= \sum_{m=0}^{M-1} (a_m \cos m\omega t + b_m \sin m\omega t) \\
 a_m &= \frac{2}{T} \int_0^T f(t) \cos m\omega t dt \quad m=0, 1, \dots \\
 b_m &= \frac{2}{T} \int_0^T f(t) \sin m\omega t dt \quad m=0, 1, 2, \dots
 \end{aligned}$$

第 $k$ 項のフーリエ係数は ;

$$\begin{aligned}
 a_k &= \frac{2}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \cos k\omega nh \\
 b_k &= \frac{2}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \sin k\omega nh
 \end{aligned}$$

第 $k$ 項のフーリエ変換をフーリエ係数  $a_n$ 、 $b_n$  に一致するように  $2/N$  で考えると ;

$$\begin{aligned}
 F(k\omega) &= \text{Re}[F(k\omega)] + j \text{Im}[F(k\omega)] \\
 \text{Re}[F(k\omega)] &= \frac{2}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \cos k\omega nh = a_k \\
 \text{Im}[F(k\omega)] &= -\frac{2}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh) \sin k\omega nh = -b_k
 \end{aligned}$$

第 $k$ 項のフーリエ係数の式または  $\text{Re}[F(k\omega)]$ 、 $\text{Im}[F(k\omega)]$  の式を使うと表計算ソフトで計算することができます。

$= 2 f_0$  の  $f_0$  は 1 周期  $T$  の逆数です。  $T = Nh$ 、 $N$  はサンプル数、 $h$  はサンプル時間間隔ですから、 $h$  が一定なら  $N$  は周波数分解能  $f_0$  に関係します。

## (7) フーリエ係数の計算例

前号で 10Hz と 20Hz の cos を合成した；

$$f(t) = f(nh) = \cos(20\pi nh + \theta) + \cos(40\pi nh + \phi)$$

$$\theta = 30 \text{ (deg)} = \frac{30 \times 2\pi}{360} \quad (\text{rad})$$

$$\phi = 45 \text{ (deg)} = \frac{45 \times 2\pi}{360} \quad (\text{rad})$$

のサンプルデータを作ってみました。

$f(t)$  の式から時系列データを作り、 $f(t)$  の 10Hz のフーリエ係数の計算をするにあたり、次のような数値を代入し計算してみましょう。

- ・ サンプル周波数 1000Hz、
- ・ サンプル時間  $h = 1/1000$  (s)、
- ・ サンプル数  $N = 2048$
- ・  $t = nh$
- ・  $n = 0, 1, 2, \dots, 2047$

として

$n, nh, f(nh), \cos(20\pi nh), \sin(20\pi nh), f(nh)\cos(20\pi nh), f(nh)\sin(20\pi nh)$  を順に A ~ G 列で計算します。

そして；

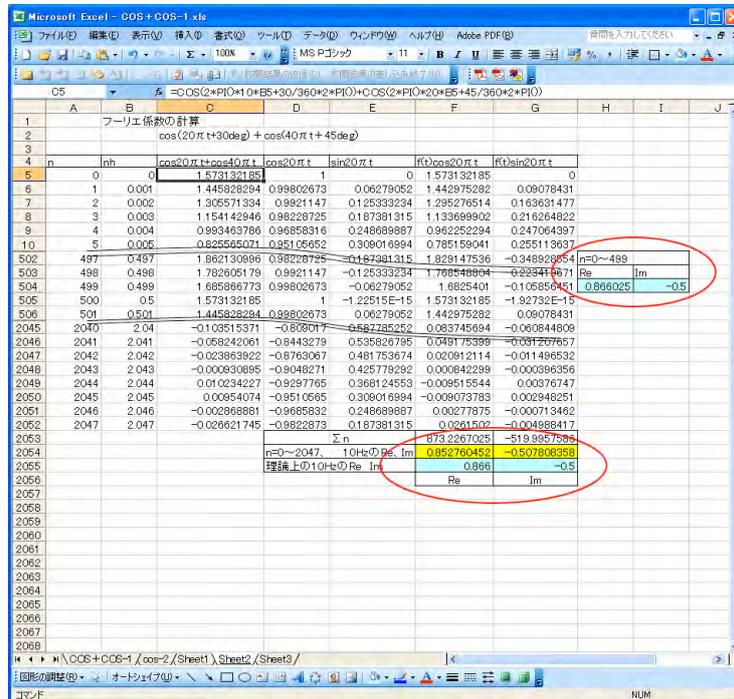
$$a(10\text{Hz}) = \frac{2}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh)\cos(20\pi nh) \quad (\text{F列の合計から計算する})$$

$$b(10\text{Hz}) = \frac{2}{N} \sum_{n=0}^{N-1} f(nh)\sin(20\pi nh) \quad (\text{G列の合計から計算する})$$

にて 10Hz のスペクトル  $a, b$  を  $N = 500$  ( $n = 0 \sim 499$ ) と  $N = 2048$  ( $n = 0 \sim 2047$ ) の場合を求めると；

$N = 500$ ( $Nh = 0.5\text{s}$ ) の場合	$a = 0.866$	$b = -0.500$
$N = 2048$ ( $Nh = 2.048\text{s}$ ) の場合	$a = 0.853$	$b = -0.508$

Microsoft-EXCEL での計算の様子



$f(t)$ の式から 10Hz のスペクトルは；

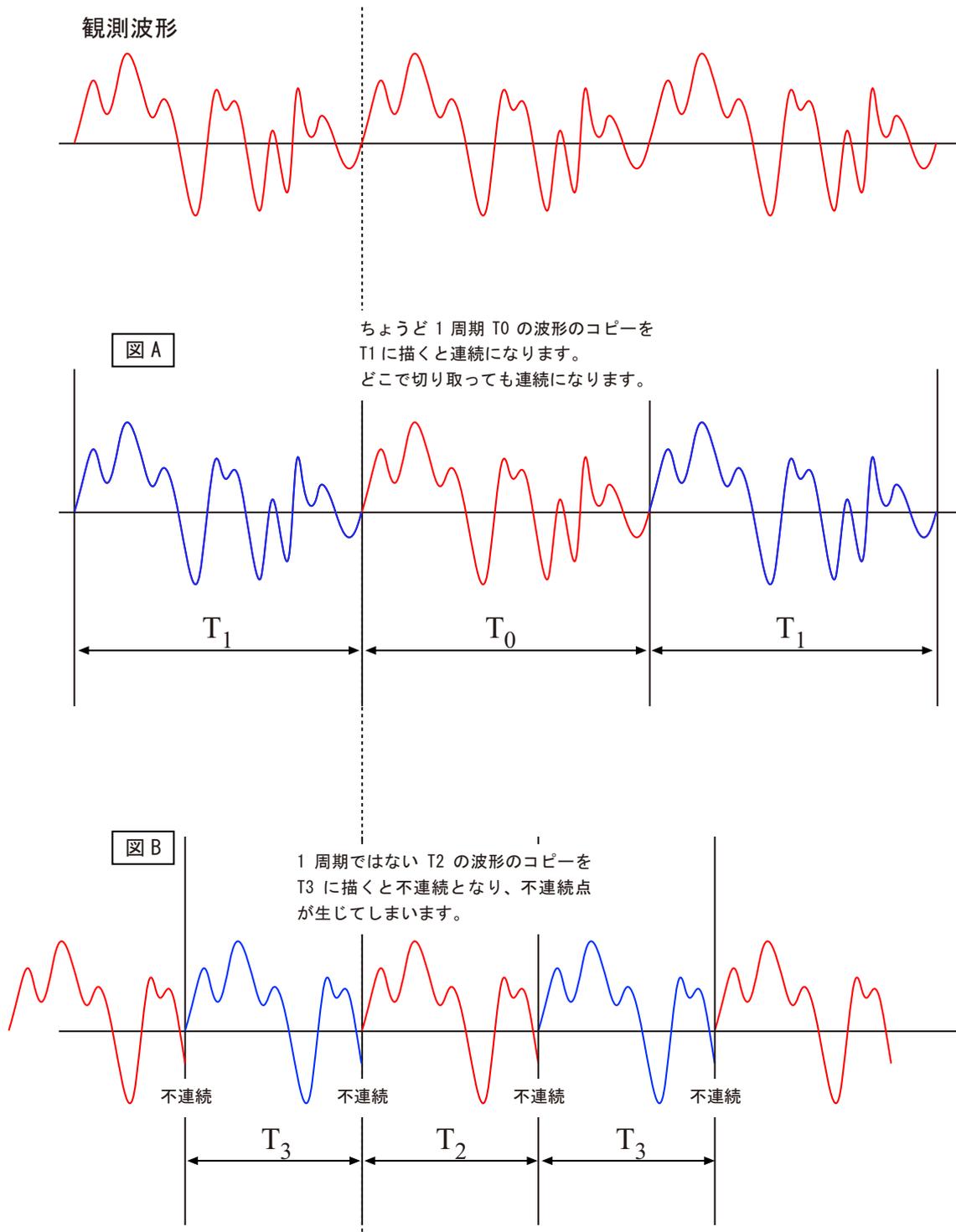
$$a = \cos 30 \text{ deg} = 0.866 \quad b = \sin 30 \text{ deg} = 0.5$$

であることがわかっていますから、 $N = 500$  のときは一致しますが、 $N = 2048$  では少し差があります。これはフーリエ級数の仮定である「周期性」によります。

$N = 500$  ( $n = 0 \sim 499$  間で 0.5 s 間) の場合は 10Hz のちょうど 5 周期分になりますが、 $N = 2048$  では 10Hz の整数倍になっていません。

次図 A のようにちょうど 1 周期（またはその整数倍）になるように  $N$  をとると、同じ波形が連続で続いて描くことができますが、1 周期（又はその整数倍）とならない  $N$  では不連続になります（図 B）。

不連続点があると、その中間点をとることで連続となりますから、中間点で滑らかに繋がった波形として近似計算がおこなわれます。



さて、10Hz のフーリエ係数 ;

$$a = 0.866 \quad b = -0.5$$

より、

$$f_{10\text{Hz}}(t) = 0.866 \cos(2\pi \times 10t) - 0.5 \sin(2\pi \times 10t)$$

となります。さらに、この式は又、 $\text{Re} = 0.866$ 、 $\text{Im} = -b = 0.5$  より ;

$$C = \sqrt{a^2 + b^2} = \sqrt{0.866^2 + 0.5^2} = 1$$

$$\theta = \tan^{-1} \frac{\text{Im}}{\text{Re}} = \tan^{-1} \frac{0.5}{0.866} = \frac{\pi}{6} \quad (30 \text{ deg})$$

$$f_{10\text{Hz}}(t) = \cos\left(2\pi \times 10t + \frac{\pi}{6}\right)$$

であることがわかります。

同様に、他の周波数成分を求めると、観測波形  $f(t)$  は ;

$$f(t) = \sum f_n(t)$$

となります。

これが、FFT アナライザの概念です。